

洗脳は暴力だ。不当な暴力に屈してはならない。プロパガンダはプロパガンダと認識され、忌避されるべきものである。洗脳に負けてはならない。

暴力の有効性はナチスによって証明された。死を生に対する暴力だとすれば、人間が暴力から逃れることは不可能なのかもしれない。知っているつもりで知らないと、そこにつけ込まれる。プロパガンダというものを知っているつもりで、まんまとそれにひっかかっていた。プロパガンダはとにかく恐ろしい。

つまり「恐怖」である。この感情がいけなかった。恐れを抱けば抱くほど、その印象は強烈になる。強烈な刺激に向き合うとき、その方途がわからないのだ。上京初日の東京駅だ。吹雪の槍ヶ岳だ。どういう態度で臨めばいいのかわからない。どの方向性で受け入れればいいのかわからない。

超人的な芸術を芸術と認めることはできるのに、それ以外のものはどうにか受け入れがたい。素直に美しいと思うことができるものを芸術だと思っていたかった。だとすれば私は大人しくキリスト教美術の授業を受けていれば良かったのかもしれない。一方で「人間はなぜ芸術というものを遙か昔から受け継いできたのか」、「不要なものではないのか」、「有機的な生活の中で人が芸術を求めるのはどのようなときか」「芸術と無縁に暮らす人は、そうでない人とどう違うのだろうか」といった、ただの文句のような批判をこれから先もずっとしていくのは嫌だった。

着地点の見えない衝動をどう扱っていいのかは知らない。芸術という枠で囲んでしまえば、考えなくて済む。しかし、それを考えないままに生きていくと、選択肢が少ないためにどこかで誤った道に進んでしまうかもしれない。

いまだに何かがあったような気はしないが、何かについて考える、ということはどうなるようになったかもしれない。つまり、忌避していた洗脳にまんまとひっかかってしまった訳であるが、これをどう考えればいいのだろうか。

暴力が違う方向性への道を開くこともあるという証明になるのか、暴力は暴力だということ証明してしまうのか、その両方だろうか。洗脳は良くないことだと思うが、脳を洗うのはいいことだと思う。余計な恐怖を洗い落してもものを見れば、暴力からは逃れられるかもしれない。また、深くその意味を考えて恐怖しているよりも、素直な感情をぶつけてみるのが、プロパガンダの種明かしにつながることもある。そのことを、今回身をもって知ったように思う。

プロパガンダを退けるためには、真にプロパガンダを知っていなければならない。つまり、プロパガンダをプロパガンダするようなメタ的視点がプロパガンダには必要だ。現代芸術はメタ認知をメタ認知する、つまり背中を見ている背中を見ている、そのような雰囲気を感じた。